

令和2年度 徳島県小学校教頭研修部会研究計画

1 研究主題

未来を生きる力を育む 魅力ある学校づくり

— 郷土を愛し 郷土との関わりを深め 未来を切り拓いていく人財の育成 —

《参 考》

全公教第12期キーワード『自立・協働・創造』について

キーワードは、『全国公立学校教頭会の研修』検討委員会報告を受け、テーマだけでは表しきれない会員一人一人の課題意識やその時々々の教育課題を表そうと、第10期より設定された。統一研究主題のように、期間に縛られず1年間ごとに見直すことが可能である。

今回の『自立・協働・創造』について、「2019年度研究の手引き」には次のように示されている。

第3期教育振興基本計画の「Ⅲ. 2030年以降の社会を展望した教育政策の重点事項」には、『第2期教育振興計画（以下「第2期計画」という。）で掲げた「自立」「協働」「創造」の3つの方向性を実現するための生涯学習社会の構築を目指すという理念を引き続き継承し、教育改革の取組を力強く進めていく必要がある。』と示されています。第2期計画で、我が国に求められているものは、「自立」「協働」「創造」であると明確に示されていたこの3つの方向性は、第12期研究主題でも、キーワードとして継承していきます。

2 研究主題について

今、人生100年時代を迎えようとしています。また、超スマート社会(Society5.0)の実現に向けて人工知能(AI)やビッグデータの活用などの技術革新も急速に進んでいます。人口減少・高齢化・グローバル化などの進展、子供の貧困問題、社会経済的な課題や地域間格差等、解決の見通しが難しい課題が山積しています。

こうした社会の変化を乗り越え、全ての人が、豊かな人生を生きるために必要な力を身に付け、活躍する上で、教育の力の果たす役割は重大です。未来を力強く生きるために、自ら主体的に行動し、他者と協働しながら新しい価値を生み出し、課題の解決や改善をしていく「生きる力」を今こそ、子供たちに育てていく必要があります。そのためには、新しい学習指導要領の趣旨を受け、社会の変化を柔軟に受け止め、社会に開かれた教育課程を実現し、これまで以上に子供たちにとって魅力ある学校づくりを推進していかなければなりません。

また、我が国の教育の質を維持し続けるためには、教職を目指す優秀な人材を確保することが必要です。そのためには、未来を担う子供たちを育てる教育という仕事の魅力を、発信していくことが重要になってきます。

第12期の研究主題に設定した「未来を生きる力」とは、子供たちが時代の進展・変化に的確に対応する「生き抜く力」であり、自ら積極的に未来を創造する意欲をもち行動する「生きる力」でもあります。第11期の全国統一研究主題「豊かな人間性と創造性を育み未来を拓く学校教育」では、新たな夢を描く想像力と新

たな夢を実現する創造力(自ら積極的に未来を切り拓いていく生きる力)を育むことの重要性が解明されました。第12期では全国統一研究主題を「未来を生きる力を育む 魅力ある学校づくり」として、子供たちにとっても、教員にとっても「魅力ある学校づくり」を具現化していきたいと思えます。

① 未来を生きる力

「未来を生きる力」とは、子供たちが時代の進展・変化に的確に対応する「生き抜く力」であり、自ら積極的に未来を創造していく意欲を持ち行動する「生きる力」です。

もちろん、第11期の研究主題に掲げられていた「豊かな人間性と創造性」は「生きる力」の中心的なものと考えています。「豊かな人間性」とは、自らを律しつつ他人とともに協調し、他人を思いやる心、人間としてのやさしさや人との絆、きめ細やかな感性、夢をもつ想像力などを示しています。「創造性」は、学んだことを生かして新しいものを生み出そうとする夢をもち、困難な中にあっても粘り強く、その困難に挑戦し乗り越えていく意欲などです。

特に、人との絆を大事にし、自分の個性を生かしつつ自ら考え行動し他者と協働しながら現状を打開することは、引き続き重視し、発展させていきます。

② 魅力ある学校づくり

学習指導要領の前文にもあるように、「よりよい学校を通して、よりよい社会を創る」という理念を受け、社会に開かれた教育課程の実現にむけて、副校長・教頭として「魅力ある学校づくり」に取り組んでいくことが重要です。子供たちが笑顔で学校に通い、安心して教育を受けられることはもちろん、保護者や地域住民の方たちに信頼していただける「魅力ある開かれた学校づくり」に取り組まなければなりません。

同時に、新しい時代の教育に向けた持続可能な学校指導・運営体制の構築のため、学校における働き方改革の着実な具現化を図り、教師にとっても「魅力ある学校」となるように努めていかなければなりません。教職の魅力を発信し、新たな時代の教育に対応できる質の高い教師の確保につなげていきます。

3 サブテーマについて

第12期全国統一研究主題「未来を生きる力を育む 魅力ある学校づくり」のキーワード「自立・協働・創造」については、次のように捉えています。

「**自立**」とは、子供たち一人一人が多様な個性・能力を伸ばし、充実した人生を主体的に切り拓いていくこと。

「**協働**」とは、個人や社会の多様性を尊重し、それぞれの強みを生かして、ともに支え合い、高め合い、社会に参画すること。

「**創造**」とは、自立・協働を通じて更なる新たな価値を生み出すこと。

また、徳島県では未来を担う全ての「人」に、徳島が誇るべき歴史と風土、脈々と受け継がれてきた「進取の気質」をしっかりと継承するとともに、未知なる世界を自ら切り拓き、「持続可能な社会」を創造する力を育む「徳島ならではの」未来教育を実践するため、新たな「徳島教育大綱」が策定されました。その基本方針として、大きな夢や高い目標を持って、未知の世界に果敢に挑戦する、本県の宝である「人財」の育成をめざすことが掲げられています。そして、「人財」の具体像として、「未来を切り拓いていく人財」「新たな価値を創造していく人財」「地域を輝かせる人財」を挙げています。

これらのことを踏まえ、サブテーマを「郷土を愛し 郷土との関わりを深め 未来を切り拓いていく人財の

育成」と設定した。これは、キーワードを第12期研究主題の実現に向けた切口と捉えるとともに、第12期研究の初年度として、第11期研究の成果と課題を継承していくことを意識し設定したものです。

(1) 「郷土を愛し」

今日の我が国においては、超スマート社会「Society5.0」の到来など社会のあり方が大きく変わろうとしています。また、都市化が進む一方で過疎化も進んでおり、郷土に対する愛着や郷土意識が希薄になっている傾向も見られます。このような社会においては、鋭い国際感覚や人権感覚をもち広い視野に立ちながらも、自己の基盤である郷土にしっかりと根を下ろし、郷土の発展に貢献できる人財を育成することが必要になってきます。郷土とは、自分が生まれ育った土地ないし地理的環境のことです。それだけでなく、文化的な面も含んでおり、自らがその土地で育てられてきたことに伴う精神的なつながりがある場所でもあります。「郷土を愛する」とは、歴史的・文化的な共同体としての郷土を愛し、持続可能な社会の主体者として寄与することです。郷土の自然や歴史、伝統や文化についての理解を深め、それらを尊重し、継承・発展させる態度を育成するとともに、それらを育ててきた郷土への親しみや愛着の情を深め、そこにしっかりと根を下ろし、持続可能な社会への主体者として自覚をもって、新しい社会の形成に貢献できる資質・能力や態度を養う必要があります。

(2) 「郷土との関わりを深め」

郷土を愛し、主体的に関わり、郷土のために自分ができることは何かを考え、自立して持続可能な社会の実現に向けて取り組むことは重要です。しかし、それだけでなく、郷土の人々と協働して問題解決に臨むことも必要になってきます。

郷土には、人や自然、地域を大切にする「おもいやり」の心をもち、自然豊かな郷土を愛する心を大切にしてきた先人がいます。また、チャレンジ精神や向上心に富み、可能性に果敢に挑戦する「こころいき」をもった先人もいます。厳しい自然環境を克服し、共生してきた、困難に打ち克つ「たくましさ」をもった先人もいます。このような、郷土の発展に尽くし、優れた伝統と文化を育ててきた先人たちの努力とその精神をたどり、そのよさを理解し継承するとともに、先人と対話し、新たな伝統や文化を形成していくことが重要になってきます。人と人、人と郷土との関わりを深める中で、新たな価値を創造していくことが求められているのです。

(3) 「未来を切り拓いていく」

私たちは、今日まで経験したことのない社会に直面しようとしています。このような変化が激しく将来の予測が困難なこれからの社会を生きる子供たちには、自分が未来の社会をよりよくするという使命感をもち、未知の事象に対しても果敢に挑戦し、主体的に課題を解決していく資質・能力を身に付けるとともに、多様性を認め合い、他者と協働しながら、未来を切り拓いていく力が重要になってきます。

4 研究の基本方針

(1) 学校教育の課題の解決

私たちの研究は、国民の期待に応え、教育基本法及び学校教育法の諸法規に定められた教育の目標を達成することを究極の目的とします。そのために自ら職能を高め、学校現場が抱えている課題の解明に努める必要があります。

(2) 副校長・教頭の職務内容や職務機能の追求

学校運営において、副校長・教頭としての関わりを大切にし、その職務内容を実践的に追究するとともに職務機能の充実を図ることも大切です。

(3) 研究成果を政策提言活動(要請活動)に

研究活動と政策提言活動(要請活動)は教頭会の活動の2本柱です。研究の成果を政策提言活動に生かし、教育環境の整備に役立てていくことも重要です。

5 研究内容及び研究の進め方

次の研究課題を定め、研究を進めていきます。研究を進めるにあたっては、副校長・教頭が日々実践していることを基にして、「継続性、協働性、関与性」に焦点を当てた実践研究を行うことが求められます。

(1) 研究課題について

児童生徒に「未来を生きる力を育む」ことのできる学校教育を目指し、第11期に引き続き「教育課程」「子供の発達」「教育環境整備」「組織・運営」「教職員の専門性」「副校長・教頭の職務内容や職務機能」の点から研究を進めていきます。

研究テーマを設定するにあたっては、研究主題「未来を生きる力を育む魅力ある学校づくり」との関連を図るとともに、課題の解明にあたっては「自立・協働・創造」をキーワードに研究を進めていくことが重要になります。

また、各研究課題については、以下のような内容が今後の課題として指摘されています。

第1課題 教育課程に関する課題

- 各校の実態を踏まえた教育課程の編成(校種間連携, 家庭・地域との連携・協働, 新しい教科への対応等)
- カリキュラム・マネジメントを軸とした学校改善

第2課題 子供の発達に関する課題

- これからの社会をたくましく生き抜く力, 資質・能力の育成
- 児童生徒に適切な対応や指導を行うための校内体制づくり

第3課題 教育環境整備に関する課題

- 防災体制, 安全管理に関わる環境整備の推進
- 教育の情報化への対応(ICTに関する学校環境の整備)

第4課題 子供の発達に関する課題

- 地域とのつながり(コミュニティ・スクール等), 学校間のつながりの構築に向けた方策
- 様々な状況に適切に対応できる危機管理体制の強化

第5課題 教職員の専門性に関する課題

- 教職員の協働体制づくりと、学校運営への参画意識の高揚
- 教職員の力量の向上につなげる校内研修体制づくり

(2) 継続性，協働性，関与性に焦点を当てた実践研究(3C)

○継続性 (c o n t i n u i t y)

単位教頭会・副校長会組織に改編があっても、これまでに解明されたことは何か、残された課題は何かを踏まえた問題解決型の研究を継続的に進めて欲しいと思います。

○協働性 (c o l l a b o r a t i o n)

単位教頭会・副校長会における組織的な研究として、同じ副校長・教頭としての同僚性を発揮し、協働的に研究を進めて欲しいと思います。

○関与性 (c o m m i t m e n t)

副校長・教頭として、何をすべきか、どうあるべきか、どう関わるべきかを念頭に置き、単位教頭会の課題を勤務校での自らの職務遂行や校内研修の課題に関わらせ、そこで得られた成果や課題を単位教頭会に反映させつつ研究を進めて欲しいと思います。

(3) 大会の運営について

① 代表参加制

参加者は、個人参加ではなく単位教頭会を代表して参加（代表参加）しているという使命感と責任感を持ち、質の高い研究討議を行い切磋琢磨することで、職能を高めることをねらいとしています。また、代表参加者が単位教頭会員に直接・間接的に研究協議等の様子を報告することで、研究主題に迫る取組の振り返りと教頭会の様々な取組状況やその成果と課題を共有し、会員の意識向上につながると考えています。

② 参加型の分科会

参加者自身が主体的な学習者となるように配慮し、「参加型」にしたことで、参加者の意欲が高まり、より充実した振り返りが行われるようになりました。この「参加型」研修は、現代の子供たちに、学び合う・関わり合うことが求められていることにも通じており、一斉型の授業から児童・生徒、教師も学び合う学習、つまりは教師と子供の関わりだけでなく、子供同士の関わりや教師同士の関わりを大切にした、校内研修や授業改善まで視野に入れた取組であると考えます。

③ 開かれた大会

副校長・教頭の取組や職務内容を、外部の方々に対して積極的に情報発信し、「外に開く」必要性があります。研究大会においても、様々な職種の方を講師に招いて講演をしていただいたり、地域や保護者への情報発信をしたりして欲しいと思います。

また、研究大会を通して得た情報は単位教頭会や勤務校の教職員などへ積極的に伝え、「内を開く」姿勢を示すことも重要になります。